

氏名	バターフィールド ジェフリー リー
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	博甲第 213 号
学位授与の日付	2017 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	Second Language Interaction in a University Language Lounge: A Focus on How Repair Becomes Noticeable and Repair Sequences as Potential Sites of Learning and Teaching
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 細田 由利 副査 神奈川大学 教授 デビッド・アリン 副査 神奈川大学 教授 鳥越 輝昭 副査 神奈川大学 助教 鈴木 祐一 副査 神戸大学 教授 Tim Greer

【論文内容の要旨】

近年、多くの日本の大学はランゲージラウンジという学生が英語・中国語などの言語を母語話者と練習・学習できる場所を学内に設置している。ランゲージラウンジの数は増加しているが、そこで行われる相互行為を検証する研究はまだ少ない。本研究は大学のランゲージラウンジで行われる相互行為を 16 時間録音録画し、それをデータとして用い、修復という相互行為内で発生する発話の問題、聞き取りの問題、理解上の問題に対する対処に焦点をあてている。

本研究では会話分析の手法を用い、教員と学生のランゲージラウンジにおける相互行為を分析した。本論の主な目的の一つはこういった相互行為の環境や資源を駆使して修復を行うとトラブル源を発した話者は他者修復がされたことに気付くのかを明らかにし、第二言語による相互行為内のどこでどのように学習の機会が生じるのか、を解明するために会話分析という分析手法は有意義な手法であることを示すことであった。また、修復連鎖は学習が行われ得る場であることを提示し、学生が相互行為時に適切な言葉、表現などを用いることができなかつた際に教員が修復する時にその修復連鎖によって教育の機会が生じることも示した。さらに教員は学生の発話を修復する際、いかにしてホワイトボードというその場にある資源を利用するのか、また、学生は修復された発話を産出するのにどのようにホワイトボードを活用するのか、を明確にした。

第 1 章ではイントロダクションとしてこの研究の背景を述べ、第 2 章ではこの論文に関連する多様な研究、つまり日常会話の会話分析、制度的場面における会話の会話分析、第二言語学習場面の会話分析などを紹介し、第 3 章ではこの研究の研究手法、倫理問題、信頼性、妥当性、客観性などについて説明している。

第 4 章は修復を行う教師はどのようにしてその修復をトラブル源の話者である学生に認識させることができるのか、ということを検討した。具体的にはこういった相互行為の環境や資源によってトラブル源の話者は修復に気づくのかを考察している。その結果、以下の相互行為内の環境や資源にてトラブル源の話者は修復に気づくことが明らかにされた：(a) 教員が修復をするために学生同士の会話に突然参与した際 (b) 教員が修復に「you mean」「you could say」「we say」と「say

it」という言葉を付け加えた際、(c) 学生が修復を自己開始した際、(d)トラブル源の次の順番以降に教員が「you said」や強調といった資源を同時に用いた際 (e) 修復に前方枠付けや後方枠付けがされた際、(f) 修復する部分のみが繰り返し発された際、及び (g) 修復と共にジェスチャーが用いられた際である。

第5章では相互行為中のどこでどのように学習が行われたのか、を探究した。ある practice (慣行) を突き止め、その慣行におけるそれぞれの要素を総合的に見れば、学習が行われたのではないか、ということが示唆できる、とされている。その慣行とはまず、学生は理解上の問題や相互行為時に適切な言葉を発することができないことを相互行為上公に示し、次に「あっ」などの知識変化のトークンを産出し、最後に修復された言葉を自ら後の相互行為にて用いるということである。この慣行の検証により、修復連鎖は学習が起こり得る場の一つであるということが示されている。

第6章では学生が言語的な間違いをした際、または適切な応答をできなかった際、教員はそれを言語知識不足の問題として捉え、「教える」という行為によってその知識のギャップを埋めようとするのが明確にされている。また、その場の外的資源であるホワイトボードは教員・学生によって、教育・学習のための道具としてどのように利用されたのか、を検討している。教員がホワイトボードに修復する言語アイテムを記入すると、学生は書き留められた修復に注目をするのがわかった。学生は修復された言語アイテムを目に見るにより修復を見逃さずに言語アイテムを産出できるのである。一方学生は、ホワイトボードを資源として利用することにより、修復が比較的長い文になされた場合でも修復された文が発話できたことが示された。

本研究はランゲージラウンジにおける第二言語相互行為、特に修復に焦点をあてたものである。教員は、いかなる相互行為の環境や資源を利用して修復することにより学生に他者修復がなされたことに気付かせるのか、を理解することによって、正規の語学教室など他の教育現場でも学生に修復を認識させて学習へ導く可能性が高くなるであろう、ということが示唆されている。

【論文審査の結果の要旨】

短期間に大量のデータを処理・分析し、過去の関連文献を理解してまとめ、研究を完了したことは大いに称賛に価する。また、大学のランゲージラウンジで実際に行われている相互行為を詳細に渡って記録した研究はこれまでになく、非常に貴重なものである。これにより、ランゲージラウンジが大学における英語教育に現在どのような貢献をしているのか、そして今後どのような貢献ができるか、を究明することが可能になった。さらに、一般に学習というものを示すのが難しいとされている会話分析の手法を用いて、目に見える形での学習を示したことは第二言語教育の分野および会話分析の分野に対しての大きな貢献となるであろう。

今後の課題としては次の点が挙げられる。本論文において「気づき」の概念が表面的に捉えられすぎているところがある。英語における oh は一般に（それが起こる連鎖上の位置にもよるが）知識変化のトークンとされているが、日本語の「あっ」はそれと全く一致するものなのであるか。学生の気づきが「あっ」のみならず、他の面でも示されるとさらに説得力がある論文になるであろう。また、今回の論文では多くの学生を対象に非常に短期間の学習が示されているが、今後は数名の学生を長期に渡って観察し、長期間に渡る学習を示すのも有益なことであろう。

本論文の総合評価は上記の通りで、主査、副査ともに全員一致で博士論文として十分な水準に達していると認めた。